
アルク

英語教育実態レポート

Vol. 3

—日本人の仕事現場における英語使用実態調査—

2015年3月

アルク教育総合研究所



はじめに

(株)アルクは1969年の創業以来、月刊誌『ENGLISH JOURNAL』、通信教育講座「1000時間ヒアリングマラソン」、書籍「キクタン」シリーズなど様々な英語学習教材を開発してきました。近年は英語スピーキング能力測定試験「TSST (Telephone Standard Speaking Test)」、「英語学習アドバイザー資格制度 (English Study Advisor's Certificate: ESAC)」を独自に開発・運用し、学習成果の検証や継続的学習支援のサービスも提供するようになりました。

私たちは、語学学習者に成果をもたらす有益な方法を常に追求したいと考えています。アルク教育総合研究所は、学習行動を成果に結びつきやすくするために、教材・学習法の研究、学習者個人・企業・教育機関のニーズ調査等を随時行い、調査結果を公表しています。

2014年秋、当研究所は日本人の「仕事現場における英語使用実態」に関わる調査を行いました。実態を一層明確に捉えるため、世間一般の人が「仕事で英語を使っている人」に抱く「イメージ」も調査しました。世間のイメージと実態のギャップはどこにあるのか、仕事で英語を使っている人たちとはどんな人たちなのか。ここに調査結果の概要を発表いたします。

弊社が調査・公表していくレポートが英語教育関連各位の参考になれば幸いです。

(本調査は、小泉利恵・順天堂大学准教授にアドバイスをいただき、(株)マクロミルの協力を得て実施しました)

◆本レポートの要点◆

1. 英語使用者に対する一般のイメージと実態には大きな乖離

仕事で英語を使っている人で「海外勤務・駐在経験がある」のは10%強にとどまっているのが分かった。一方、一般的には「海外勤務・駐在経験がある」のは3割以上とイメージされていた。しかし、その実態は10%超にとどまっており、業務で英語を使っている人の約6割が「日本の中だけで英語学習」してきたと回答した。また、英語使用者の「英語でほとんど誤りなくコミュニケーションができる」割合についても、実態は一般イメージより低いことが判明した。

2. 仕事をしながら英語学習を継続

仕事で英語を使っている人の9割近くが、学習の頻度や時間はまちまちでも英語学習を続けているのが分かった。仕事現場で「英語を話す・書く」を実行している人の内の約36%がTOEIC®テスト600点未満であった。英語使用者は必ずしも英語試験の高得点者ではなく、一定の不自由さを抱えながら仕事現場で英語を使っている実態が浮き彫りとなった。

3. 英語を使っているのは内勤系の人

仕事で英語を使っている人の職種には、「技術」「企画」「総務」など「内勤系」が多く、一般的にイメージされがちな「海外営業・事業」はわずかであった。

4. ノンネイティブスピーカー同士で英語を使う

日本人が英語を使用する仕事相手は、英語の「ネイティブスピーカー」と「ノンネイティブスピーカー」でその構成比に大差ないことが分かった。仕事で英語を使っている人は、TOEIC®スコアのどのレンジの人も、英語で「メールを書く」「電話で話す」を実行している割合が非常に高いのが実態である。

◆目次◆

はじめに	1
本レポートの要点	2
調査目的、調査対象	3
仕事で英語を使う人の実態	
1. 学習経験	6
2. 英語を使って何ができるのか	8
3. 学習時間	10
4. 職種	12
5. 業種	14
6. 英語の使用場面	16
7. 英語を使う仕事相手	18
まとめ・今後の課題	21

調査目的

日本の多種多様な企業が生き残りをかけて海外に進出し、海外売上比率を上げようとしている。訪日外国人の増加を受けてビジネス拡大を目指す動きも活発になってきた。それに伴い国際共通語としての英語を「使えること」の重要性が一層高まっている。英語教育に関して文部科学省は「英語を使ってできること」を能力レベルごとに記述した一覧表を作り、能力指標としてあるいは到達目標の管理のために、教育現場に取り入れる可能性を探っている。

しかしながら、実際に仕事現場で「英語を使っている人」とは具体的にどのような語学能力の人たちなのか、仕事現場では英語をどう使っているのか、その実態ははっきりと見えていないのが実状ではないだろうか。そこで、アルク教育総合研究所は下記の目的でアンケート調査を実施した。

- ① 「英語を使って仕事をしている日本人」の実態を示し、世間のイメージとのギャップを明らかにする。
- ② 日本人にとって有用な【仕事の英語 CAN-DO List】(CDL: 英語を使って何ができるのかをレベルごと、スキルごとに一覧表の形で記述したもの)を開発し、企業や教育機関で便利に使える「英語を使ってできること」の能力指標のひとつのモデルを提示する。

本レポートでは主に①に関わる調査結果の概要を提示する。

調査対象

■調査対象① 仕事で英語を使っている日本人（実態グループ）

以下の条件を満たす 2754 人をまず抽出し、この母集団から回答者 825 人を選んだ。

1. 有職者（パート、アルバイトを除く）
2. 年齢 20～59 歳
3. 過去 1 年以内に仕事で英語を「話す」「書く」形で使用した人
4. 2 年以内に取得した TOEIC[®]スコアを申告できる人
5. インターネット調査に回答可能な人

（一財）国際ビジネスコミュニケーション協会が TOEIC[®]テストのスコアレンジによってレベル A～E（A: 860～990 点、B: 730～855 点、C: 470～725 点、D: 220～465 点、E: 10～215 点）に分けているのを参考に、各グループともほぼ同じスコア幅になるように区切り、以下の 5 グループに分けて調査した。

- ① 860 点以上（レベル A）
- ② 730-855 点（レベル B）
- ③ 600-725 点（レベル C）

- ④ 470-595 点 (レベル C)
- ⑤ 465 点以下 (レベル D、E)

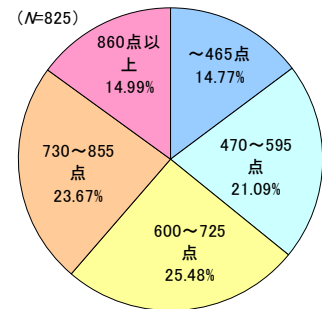
各グループから同列に情報収集するために構成比 20%に当たる 165 人を 1 グループに割り当てた。しかし、「実態」の姿を「一般イメージ」と対照させるためには、抽出したサンプルの構成比を、母集団の構成比に補正 (ウェイトバック) する必要がある。本レポートでは下記のようにウェイトバック値を求め、サンプル数を補正した。

1. 平成 22 年度国勢調査から「就業者数」を抽出し、男女比、年代別構成比を算出
2. 825 人を抽出するスクリーニング調査結果を 1 の構成比に補正し TOEIC®テストのスコア分布を算出
3. スコアの分布に合わせて本調査の回答者構成比を補正

結果として下記のような分布になった。仕事で英語を使っている人はどのスコアレンジにもいるが 35.9%は 600 点未満という結果になった。

	割付名	母集団 構成比	調査サンプル数 構成比	ウェイト バック値	ウェイトバック前 サンプル数	ウェイトバック後 サンプル数
1	～465点	14.77	20.0	0.74	165	122
2	470～595点	21.09	20.0	1.05	165	174
3	600～725点	25.48	20.0	1.27	165	210
4	730～855点	23.67	20.0	1.18	165	195
5	860点以上	14.99	20.0	0.75	165	124
合計		100.00	100.0	1.0	825	825

(平均)



なお、ウェイトバック補正の際に小数点以下を四捨五入しているため、以後の図表では合計 100.0%にならない場合がある。

■グループ内のスコア分布

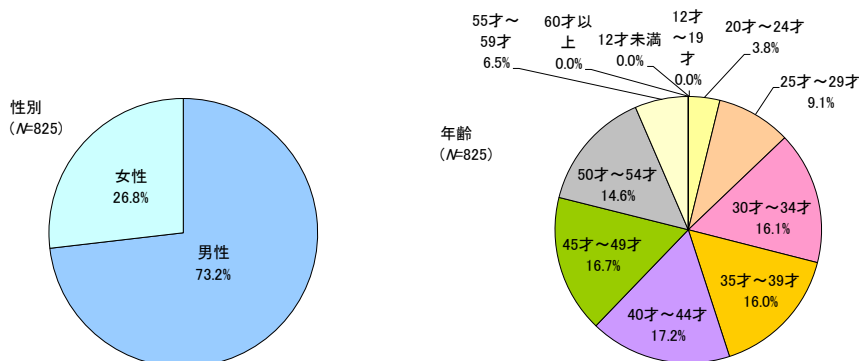
5 グループに分ける際、回答者に 45 点刻みで TOEIC®スコアを開いた結果、スコア分布は下表のようになった。465 点以下グループでは 64.8%が 400 点未満であった。

		～395点	400～445点	450～495点	500～545点	550～595点	600～645点	650～695点	700～745点	750～795点	800～845点	850～895点	900～945点	950～990点
全体	825	9.6	3.0	9.8	8.8	4.6	9.1	11.4	9.7	8.8	9.0	6.7	5.5	3.9
～465点	122	64.8	20.6	14.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
470～595点	174	0.0	0.0	36.4	41.8	21.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
600～725点	210	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	35.8	44.8	19.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
730～855点	195	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	20.0	37.0	38.2	4.8	0.0	0.0
860点以上	124	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	37.0	37.0	26.1

(人数) (横%)

■男女比率、年齢分布

性別は回答者抽出の条件に加えなかったが、男性が 73.2%となり、年齢が 30 代、40 代で 66%を占める結果となった。年齢から推察するに組織の中の「中堅クラス」に英語を使っている人が多いようだ。



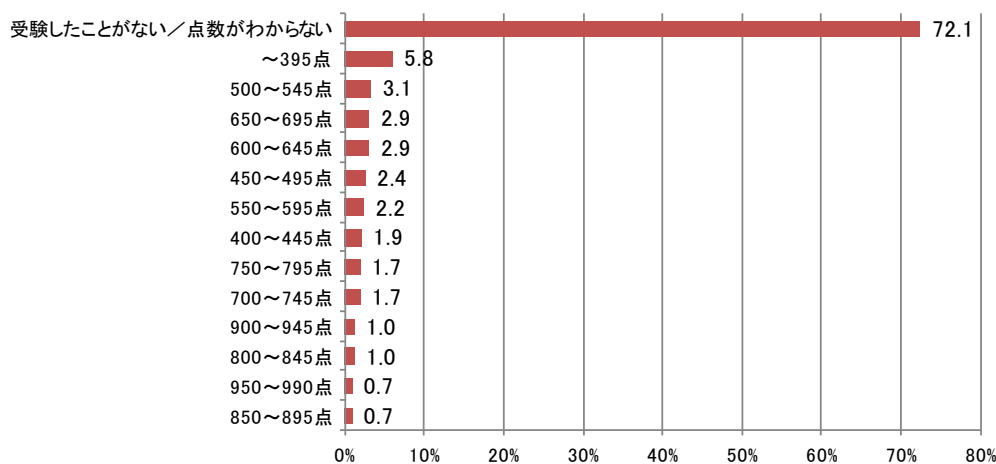
■調査対象② 「世間一般のイメージ」に関する回答者（一般グループ）

下記条件に合う 416 人を抽出した。

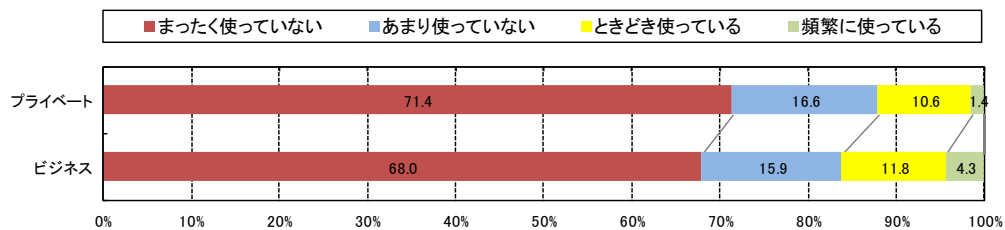
1. 日本の人口構成の年齢比・男女比に応じて抽出した年齢 20～59 歳の男女
2. 有職者（パート、アルバイトを除く）
3. インターネット調査に回答可能な人

回答者抽出の条件にはしなかったが、この 416 人の英語についての属性は以下のとおり。TOEIC®テスト未受験者またはスコア不明者が 72.1%、「聞く」「読む」も含め英語を使っていない人が全体の 85%以上を占めている。

あなたの過去において最も点数が高かったTOEICの点数はどちらになりますか。
(N=416)



直近1年間で、プライベート、ビジネスにおいて、どのくらい英語を使うことがありましたか。
※英語を「話す」「読む」「書く」「聴く」のすべてを含めてお考えください。



調査結果

以下で、仕事で英語を使っている人の実態と、一般の人が抱いている「仕事で英語を使う人」のイメージを対照させて見ていきたい。以後、仕事で英語を使う人を「実態グループ」、世間のイメージを問うた人たちを「一般グループ」と呼ぶ。

■ 1 ■ 学習経験

⇒実態グループは、一般に思われるより海外経験が少なく、国内でのみ学習した人が57.6%。

どのように英語能力を身に付けたかについて、以下のように質問した。

・一般グループ：

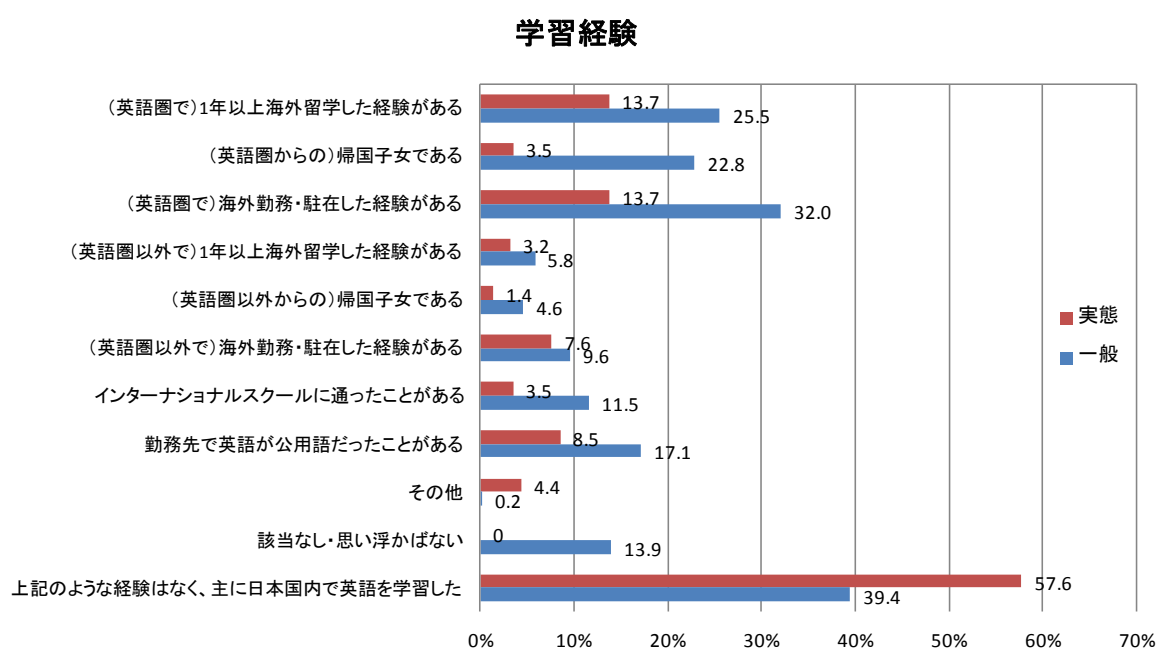
「英語を使って仕事をしている人」と聞いて、あなたは一般的にどのような人を思い浮かべますか。あてはまるものをすべてお答えください。※英語を「話す」「読む」「書く」「聴く」のすべてを含めてお考えください。

・実態グループ：

あなたは、これまでに、どのような学習経験を経て英語力を身に付けましたか。あてはまるものをすべてお選びください。

実態グループが一般グループを上回っているのは「主に日本国内で英語を学習した」のみ、他は全て「一般グループ」の方が上回っている。英語を使って仕事をしている人は、海外経験を通じて英語を身に付けたのだろうという一般的イメージとは異なり、日本国内で地道に努力を重ねてきた学習者でもあるようだ。

1. 【主に日本国内で学習した】のは実態グループで57.6%だが、一般グループは39.4%。
2. 【英語圏で1年以上海外留学した経験がある】のは実態グループで13.7%だが、一般グループは25.5%。
3. 【英語圏で海外勤務・駐在した経験がある】のは実態グループで13.7%だが、一般グループは32.0%。

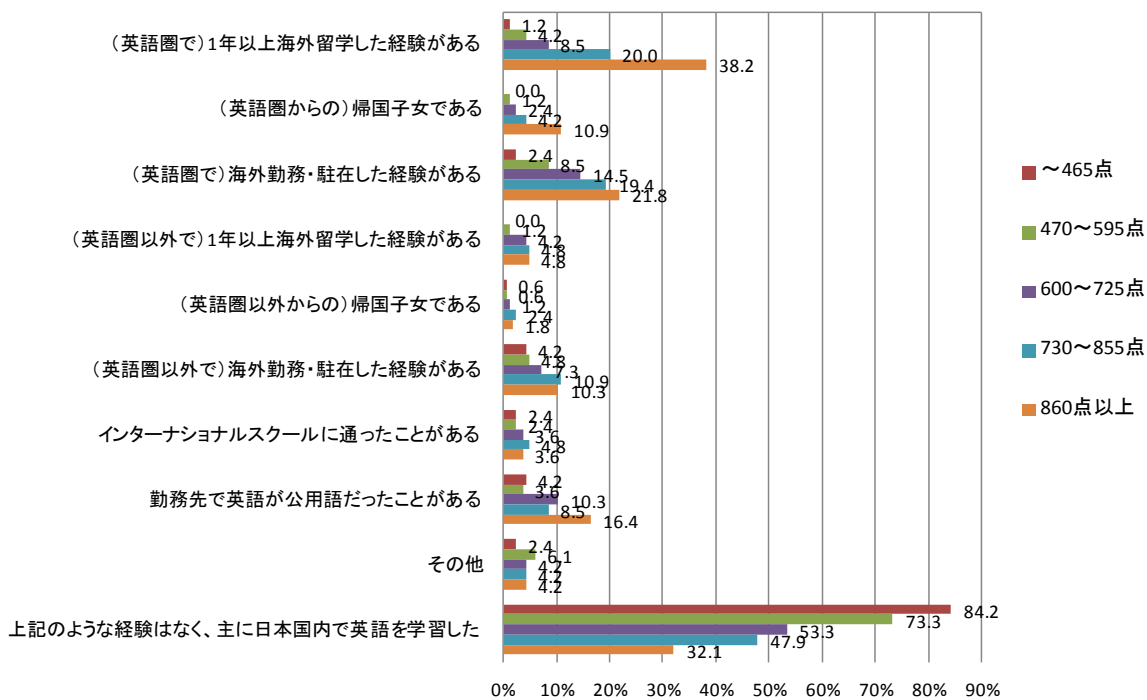


TOEIC®スコア別「学習経験」

実態グループの調査結果を TOEIC®テストのスコアレンジごとに見ると以下ようになる（人数以外の数値は%）。該当するものを全て選んだ結果である。スコアが高いほど、国内のみで学習した割合が減り、海外経験の割合が高くなっている。下のグラフから以下のような特徴が見える。

- 【主に日本国内で英語を学習した】は全体で 57.6%だが、465 点以下グループの 84.2%から 860 点以上グループの 32.1%へと、スコアが高い人ほど割合が低くなる。
- 【英語圏で1年以上海外留学した経験がある】は 470～595 点グループで 4.2%、860 点以上グループで 38.2%。
- 【英語圏で海外勤務・駐在した経験がある】は 470～595 点グループで 8.5%、860 点以上グループで 21.8%。

TOEICスコア別「学習経験」



	(英語圏で)1年以上海外留学した経験がある	(英語圏からの)帰国子女である	(英語圏で)海外勤務・駐在した経験がある	(英語圏以外で)1年以上海外留学した経験がある	(英語圏以外からの)帰国子女である	(英語圏以外で)海外勤務・駐在した経験がある	インターナショナルスクールに通ったことがある	勤務先で英語が公用語だったことがある	その他	上記のような経験はなく、主に日本国内で英語を学習した	
全体	825	13.7	3.5	13.7	3.2	1.4	7.6	3.5	8.5	4.4	57.6
~465点	122	1.2	0.0	2.4	0.0	0.6	4.2	2.4	4.2	2.4	84.2
470~595点	174	4.2	1.2	8.5	1.2	0.6	4.8	2.4	3.6	6.1	73.3
600~725点	210	8.5	2.4	14.5	4.2	1.2	7.3	3.6	10.3	4.2	53.3
730~855点	195	20.0	4.2	19.4	4.8	2.4	10.9	4.8	8.5	4.2	47.9
860点以上	124	38.2	10.9	21.8	4.8	1.8	10.3	3.6	16.4	4.2	32.1

(人数) (積%)

■ 2 ■ 英語を使って何ができるのか

⇒仕事で英語をさほど不自由なく使いこなしているのは実態グループの一部の人のみである。

「英語を使ってできること」について、以下のように質問した。回答は「〇〇ができる」という記述項目からの多肢択一方式である。

・一般グループ：

「英語を使って仕事をしている人」と聞いて、あなたは一般的に最低どのくらいの英語レベルの人をイメージしますか。※複数あてはまる場合は、最も近いと思うものをお選びください。

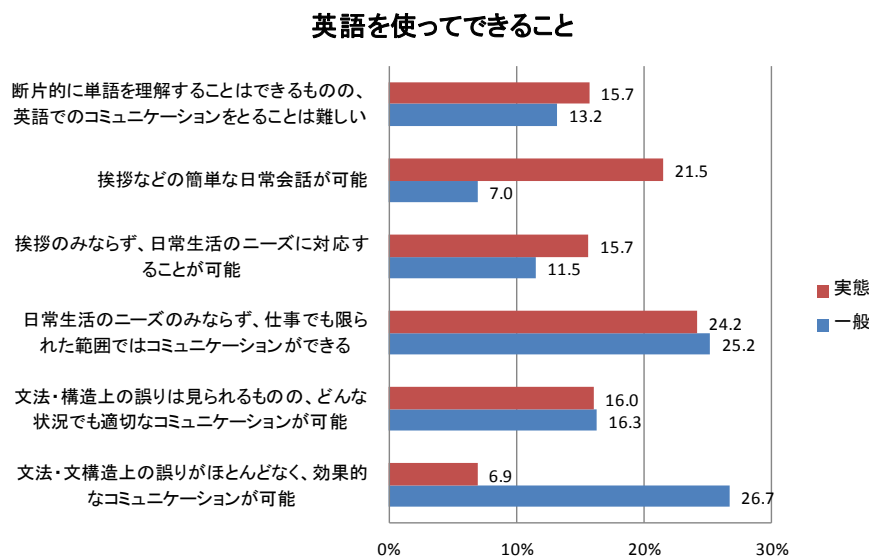
・実態グループ：

仕事で英語を使っていた当時の英語レベルはどちらになりますか。※複数あてはまる場合は、直近のことについて最も近いものをお選びください。

一般グループと実態グループで大きく異なっているのは以下の2点である。

1. 【文法・構造上の誤りがほとんどなく、効果的なコミュニケーションが可能】は実態グループ 6.9%、一般グループは 26.7%。
2. 【挨拶などの簡単な日常会話が可能】は実態グループ 21.5%、一般グループは 7.0%。

グラフから見える「仕事で英語を使う人」は、一般イメージに反して、「効果的」または「適切」に英語を使いこなしているのは一部（約 23%）にとどまっている。一定の不自由さを抱えながらも英語を使っている、ということが実態である。



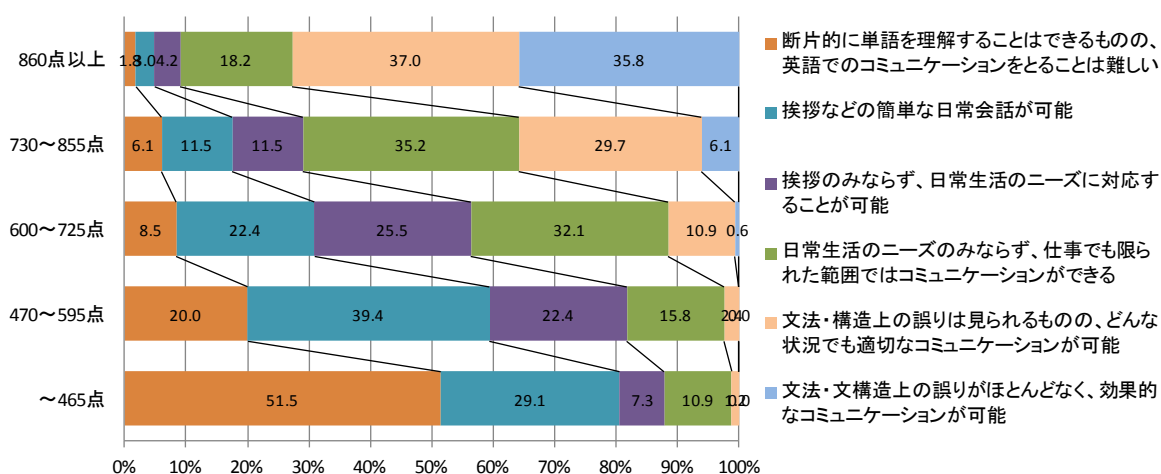
TOEIC®スコア別「英語を使ってできること」

「英語を使ってできること」に関して TOEIC®スコア別に実態グループ 825 人の自己評価を見てみると下の表のようになる（人数以外の数値は%）。スコアが低い層も英語を使用しているが、【日常生活のニーズのみならず、仕事でも限られた範囲ではコミュニケーションができる】というのは 600~725 点、730~855 点のグループにおいて比率が高い。

下のグラフからは以下のような特徴が見える。

1. グループのスコアレンジが上がっていくにつれ、高度な内容の「英語を使ってできること」の比率が上がっている。
2. 【文法・文構造上の誤りは見られるものの、どんな状況でも適切なコミュニケーションが可能】との回答が約 30% かそれ以上となるのは 730 点以上のグループである。
3. 【日常生活のニーズのみならず、仕事でも限られた範囲でコミュニケーションができる】は「465 点以下」で 10.9% いるが、割合が最多なのは「730~855 点」の 35.2%、次いで「600~725 点」の 32.1% である。
4. 「465 点以下」では【断片的に単語を理解することはできるものの、英語でのコミュニケーションをとることは難しい】と自己評価しているのは 51.5%、【挨拶など簡単な日常会話が可能】は 29.1% である。このグループも仕事で英語を使っていることを考え合わせると、仕事で英語を使って「話す」「書く」場合は、よく知っている自分の仕事分野で頻繁に出会うある程度定型的な英語を使っているのかもしれない。

TOEICスコア別「英語を使ってできること」



	断片的に単語を理解することはできるものの、英語でのコミュニケーションをとることは難しい	挨拶などの簡単な日常会話が可能	挨拶のみならず、日常生活のニーズに対応することが可能	日常生活のニーズのみならず、仕事でも限られた範囲ではコミュニケーションができる	文法・構造上の誤りは見られるものの、どんな状況でも適切なコミュニケーションが可能	文法・文構造上の誤りがほとんどなく、効果的なコミュニケーションが可能
全体	825	15.7	21.5	15.7	24.2	16.0
~465点	122	51.5	29.1	7.3	10.9	1.2
470~595点	174	20.0	39.4	22.4	15.8	2.4
600~725点	210	8.5	22.4	25.5	32.1	10.9
730~855点	195	6.1	11.5	11.5	35.2	29.7
860点以上	124	1.8	3.0	4.2	18.2	37.0

(人数) (横%)

■ 3 ■ 学習時間

⇒仕事で英語を使っている人の学習頻度・時間に関しては、一般イメージと実態に大きな乖離はない。^{かいり}
 実態グループの87.2%の人が仕事外の時間で英語学習を続けている。

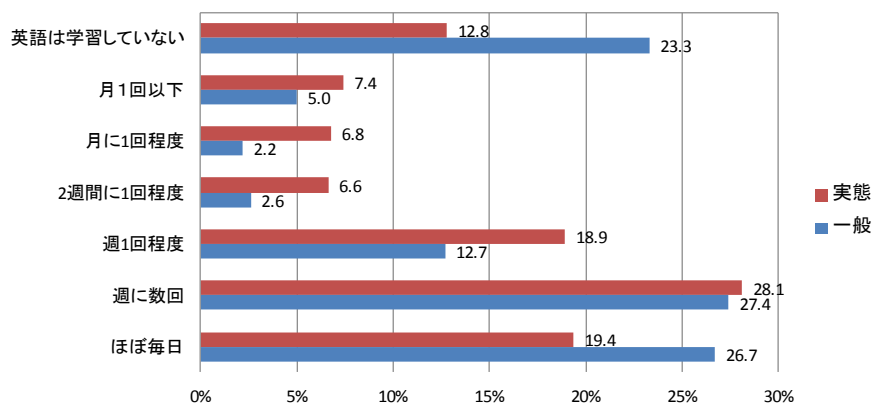
英語の学習頻度と時間について、以下のように質問した。回答は多肢択一方式である。

- ・一般グループ：
 - ・「英語を使って仕事をしている人」は、普段、どのくらいの頻度で仕事以外で英語を学習していると思いますか。
 - ・「英語を使って仕事をしている人」は、普段、どのくらいの時間、仕事以外で英語を学習していると思いますか。
- ・実態グループ：
 - ・仕事で英語を使っていた当時、どのくらいの頻度で仕事以外で英語を学習していましたか。
 - ・仕事で英語を使っていた当時、仕事以外で英語の学習時間はどれくらいでしたか。

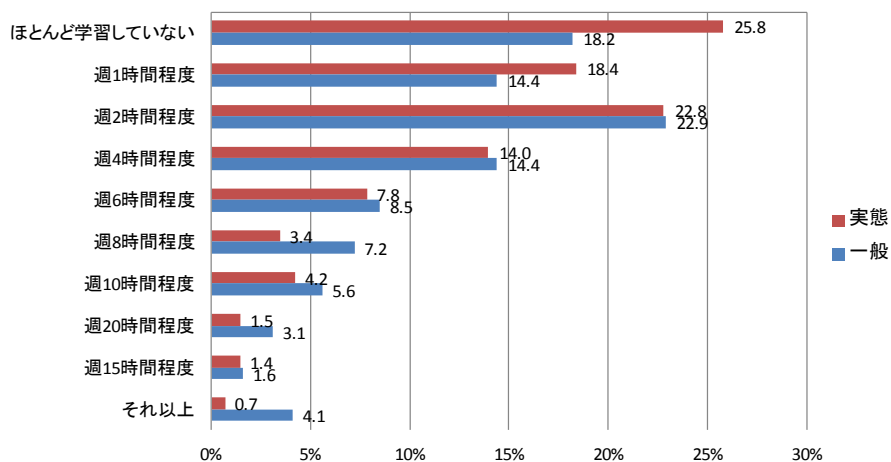
グラフからは以下のことが言える。

1. 学習頻度に関し、【ほぼ毎日】【週に数回】【週1回程度】をまとめると、実態グループは66.4%、一般グループのイメージは66.8%でほぼ同じ。
2. 学習時間に関し、【週1時間程度】【週2時間程度】【週4時間程度】をまとめると、実態グループは55.2%、一般グ

学習頻度



学習時間



グループは51.7%でほぼ同じといえる。

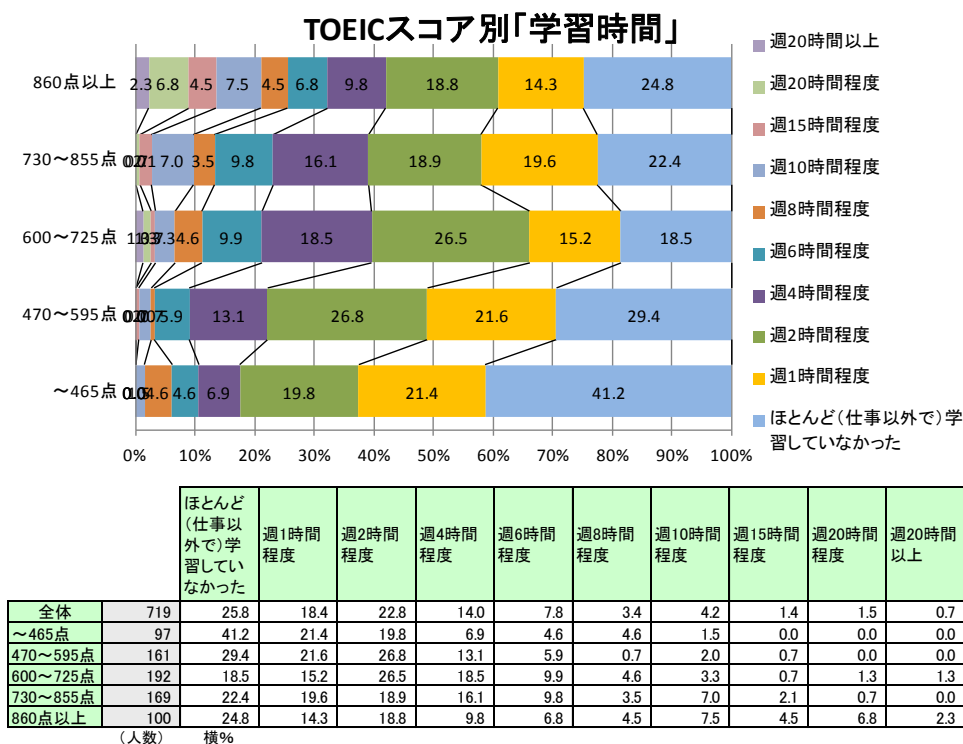
3. 実態グループの【英語は学習していない】は12.8%。言いかえれば、英語を使って仕事をしている人の87.2%は英語を学習し続けている、ということになる。

TOEIC®スコア別「学習頻度・時間」

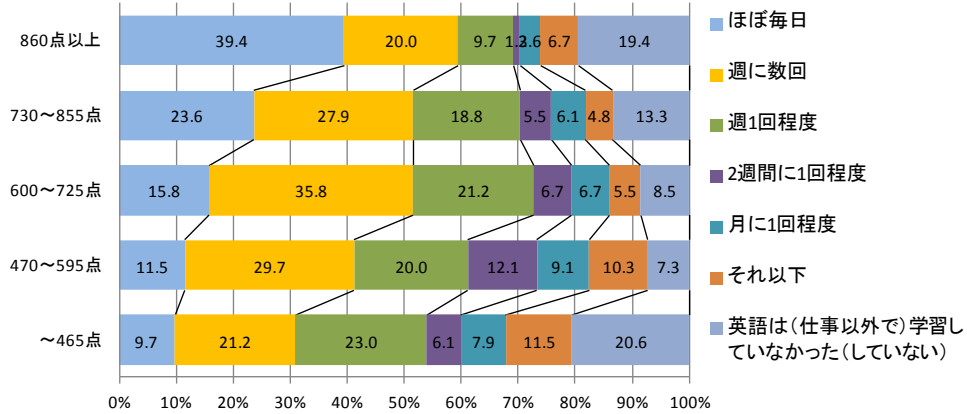
TOEIC®スコアグループ別に英語学習の様子を見てみる。スコアに関わらず【週に数回】【週に1（2）時間程度】学習する人が多い。【ほぼ毎日】学習するというのが860点以上グループで39.4%と最多になっているのが特徴的である。スコアが高い人ほど学習頻度が高く学習時間も長くなっている傾向がみえる。

グラフから読み取れる特徴は、以下のとおりである。

1. 【ほぼ毎日】学習は、「860点以上」で39.4%、「600~725点」で15.8%、「465点以下」で9.7%とスコアが下がるに従い比率も下がっている。
2. 【週1回程度】学習は、「860点以上」で9.7%、「600~725点」で21.2%、「465点以下」で23.0%。855点以下ではグループによる差が小さい。
3. スコアグループごとに割合が最多の「学習頻度」を見ると、「465点以下」は【週1回程度】で23.0%、「470~595点」「600~725点」「730~855点」は【週に数回】、「860点以上」は【ほぼ毎日】となっている。860点以上グループは英語のニュースなどに毎日触れている、ということかもしれない。
4. 最も割合の高い「学習時間」は【ほとんど（仕事以外で）学習していなかった】だが、600~725点グループのみが例外である。全体の25.5%という最高の構成比率を占めるこのグループは【週2時間程度】が最多の26.5%となっている。



TOEICスコア別「学習頻度」



	人数	ほぼ毎日	週に数回	週1回程度	2週間に1回程度	月に1回程度	それ以下	英語は(仕事以外で)学習していなかった(していない)
全体	825	19.4	28.1	18.9	6.6	6.8	7.4	12.8
~465点	122	9.7	21.2	23.0	6.1	7.9	11.5	20.6
470~595点	174	11.5	29.7	20.0	12.1	9.1	10.3	7.3
600~725点	210	15.8	35.8	21.2	6.7	6.7	5.5	8.5
730~855点	195	23.6	27.9	18.8	5.5	6.1	4.8	13.3
860点以上	124	39.4	20.0	9.7	1.2	3.6	6.7	19.4

4 職種

⇒仕事で英語を使う職種は、【企画】【技術】【総務】【研究】など「内勤系」に多い。

英語を使って仕事をする人の「職種」について、以下のように質問した。回答は多肢択一方式である。

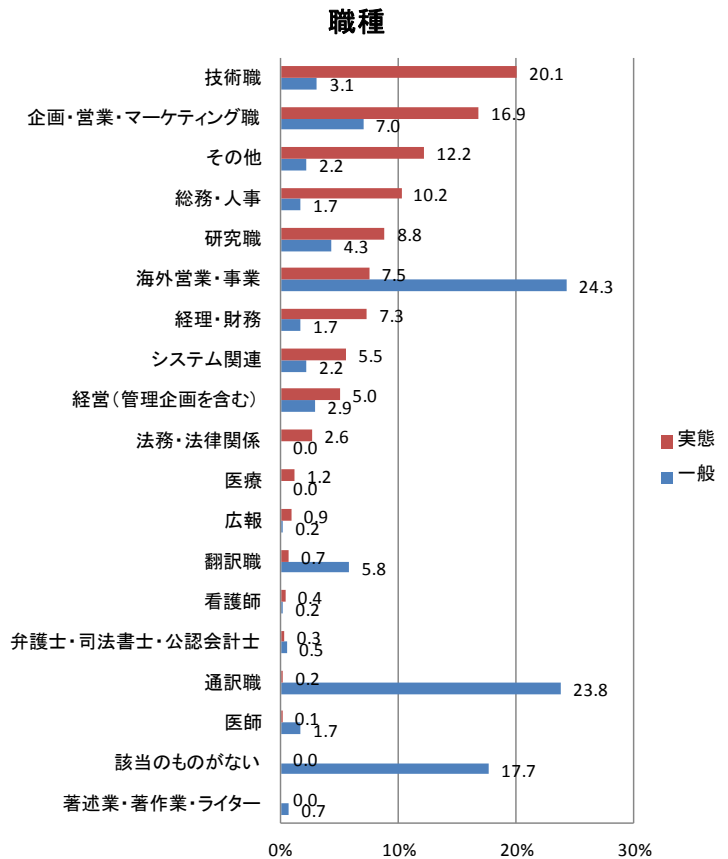
・一般グループ：

あなたが知っている「英語を使って仕事をしている人」の職種をお選びください。

・実態グループ：

仕事で英語を使っていた当時の職種はどちらになりますか。※複数あてはまる場合は、直近の職種についてお選びください。

右グラフから見て取れるように、一般の人が思い描く「仕事で英語を使う人」は【海外営業・事業】【通訳職】【翻訳職】であるが、実態は【技術職】【企画・営業・マーケティング】【総務・人事】【研



究職】【経理・財務】などいわゆる内勤系の職種で英語を使っている人が多いのが分かった。【翻訳職】【通訳職】を選ぶ人が一般グループに目立つのは、「知っている」人を自分の知人ではなく一般論として回答したためと思われる。一般グループで【該当のものが無い】と回答した人は具体的に「教師、パイロット、秘書、管制官」などの職種を挙げていた。

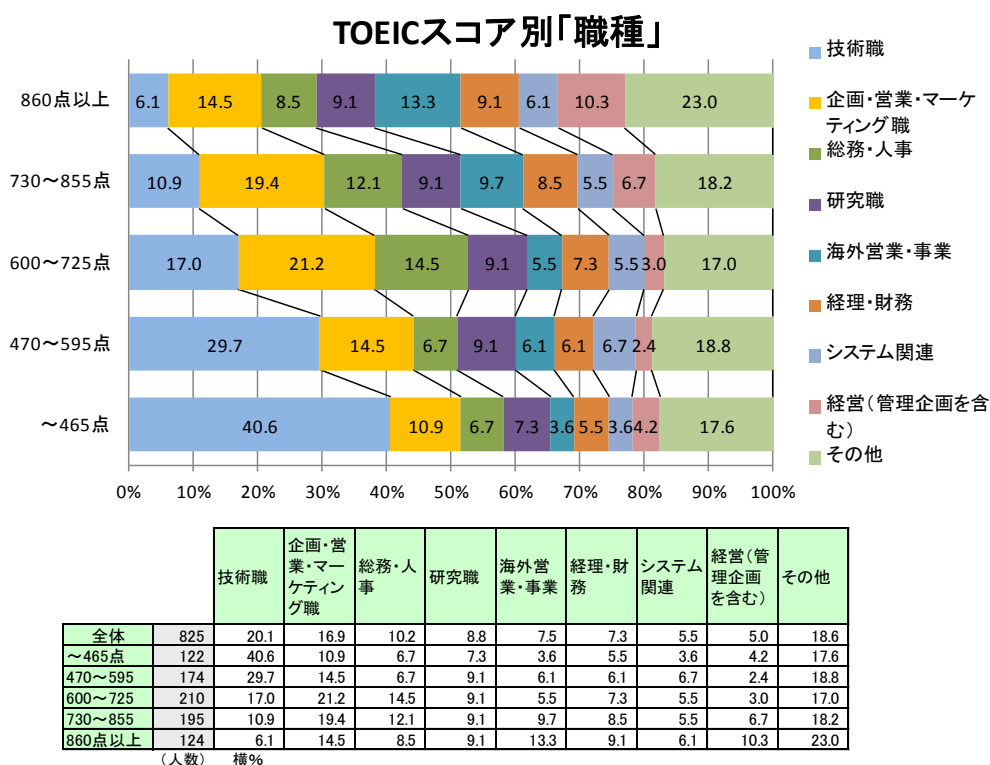
1. 実態グループの【海外営業・事業】は7.5%、一般グループは24.3%。
2. 実態グループの【技術職】は20.1%、一般グループは3.1%。
3. 実態グループの【企画・営業・マーケティング職】は16.9%、一般グループは7.0%。
4. 実態グループの【総務・人事】は10.2%、一般グループは1.7%。

TOEIC®スコア別「職種」の分布

仕事で英語を使っている825人の内、30人以上が該当した「職種」は下のグラフで取り上げた8職種であった(技術職、企画・営業・マーケティング職、総務・人事、研究職、海外営業・事業、経理・財務、システム関連、経営(管理企画を含む))。それ以外の職種を「その他」として図表にまとめたのが下記である。

職種内でのTOEIC®スコア分布をみると、【技術職】は相対的に低スコア層の比率が高く、【海外営業・事業】【経営(管理企画を含む)】では高スコア層の比率が高くなっているのがわかる。

1. 【技術職】: TOEIC®テスト全体のスコア分布を反映し高スコア者ほど少数になるピラミッド型。
2. 【海外営業・事業】【経営(管理企画を含む)】【経理・財務】: 高スコア者が多い逆ピラミッド型。
3. 【システム関連】【研究職】: どのスコア層もほぼ均等の分布になっている。
4. 【企画・営業・マーケティング職】【総務・人事】: 相対的に高得点者の比率が高い。



■ 5 ■ 業種

⇒一般イメージと実態に大きなギャップがあるのは【製造業】【翻訳・通訳】【商社・卸業】である。TOEIC[®]スコア別の「業種」分布を見ると【製造業】【金融業】などでその「型」はかなり異なっている。

英語を使って仕事をする人の「業種」について、以下のように質問した。回答は多肢択一方式である。

・一般グループ：

あなたが知っている「英語を使って仕事をしている人」の業種をお選びください。

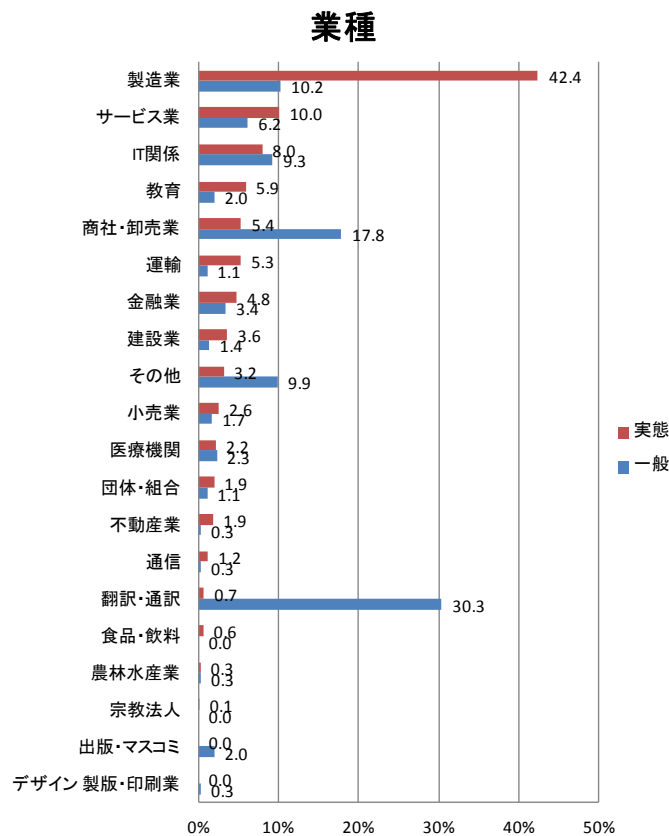
・実態グループ：

仕事で英語を使っていた当時の業種はどちらになりますか。※複数あてはまる場合は、直近の業種についてお選びください。

一般イメージと実態にギャップが大きい業種は【製造業】【商社・卸売業】【翻訳・通訳】であった。【翻訳・通訳】を選ぶ人が一般グループに目立つのは、「知っている」人を自分の知人ではなく一般論として回答したためと思われる。【その他】と回答した一般グループの人は具体的に「貿易、コールセンター、公務員」などの職種を挙げていた。

グラフから見える特徴は以下の2点である。

1. 実態グループの【製造業】は42.4%、一般グループは10.2%。
2. 実態グループの【商社・卸売業】は5.4%、一般グループは17.8%。

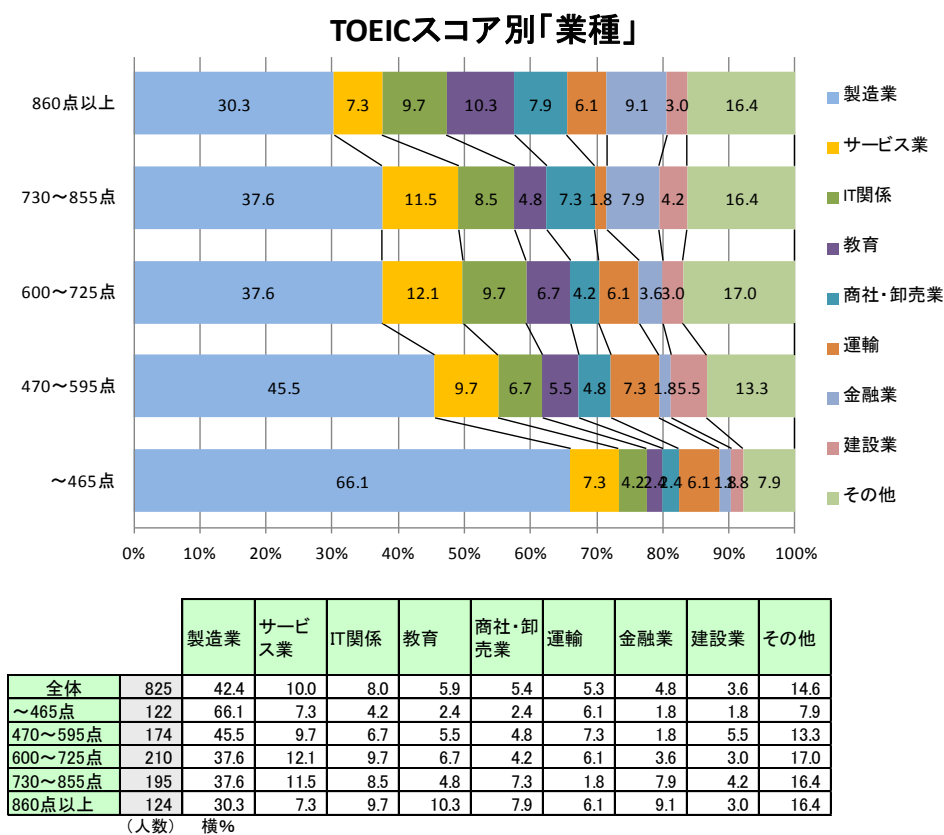


TOEIC®スコア別「業種」の分布

仕事で英語を使っている 825 人の内、30 人以上が該当した「業種」は下のグラフで取り上げた 8 種であった（製造業、サービス業、IT 関係、教育、商社・卸売業、運輸、金融業、建設業）。それ以外を「その他」としてまとめたのが下の図表である。

TOEIC®スコア別に業種の分布をみると、特徴があるのは【製造業】【金融業】【商社・卸売業】【教育】である。その他の業種では特定のスコア層に大きな偏りは見られない。

1. 【製造業】：TOEIC®テスト全体のスコア分布を反映し低スコアグループの比率が高いピラミッド型分布になっている。
2. 【金融業】【商社・卸売業】【教育】：高スコアグループの比率が高い逆ピラミッド型になっている。



■ 6 ■ 英語の使用場面

⇒仕事で英語を使うのが多い場面は【メール】と【電話】である。

「仕事で英語を使っている人」の英語使用場面について以下のように質問した。多肢複数回答である。

・一般グループ：

あなたが知っている「英語を使って仕事をしている人」は、どのような場面・シーンで英語を使っていますか。あてはまるものをすべてお選びください。

・実態グループ：

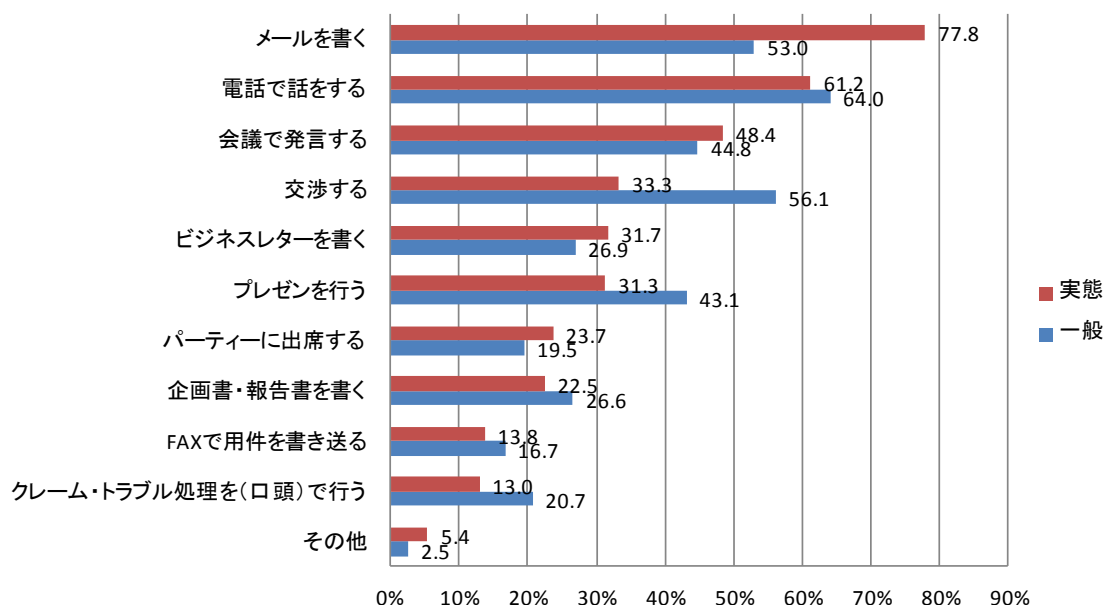
あなたが、直近1年以内で、仕事で英語を使った（話す、書く）シーンをすべてお選びください。※英語を「話す」「書く」に限定してお答えください。

下のグラフから分かるように実態グループと一般グループで比較的大きな乖離^{かいり}があるのは【メールを書く】【交渉する】【プレゼンを行う】である。一般グループが【交渉する】【プレゼンを行う】の項目で実態グループを大きく上回っているのは、「人前で話す」ことが英語で仕事をするイメージと結びついているためと思われる。

一般グループが【その他】として挙げている英語の使用場面には、「接客、学会での発表、文書翻訳、英語の書類を読む、授業」などがあつた。実態グループが挙げた【その他】の場面には「授業をする、工場案内をする、論文執筆」等が含まれていた。

1. 実態グループの【メールを書く】は77.8%、一般グループは53.0%。
2. 実態グループの【電話で話をする】は61.2%、一般グループは64.0%で大差ない。
3. 実態グループの【交渉する】は33.3%、一般グループは56.1%。
4. 実態グループの【プレゼンを行う】は31.3%、一般グループは43.1%。

英語の使用場面

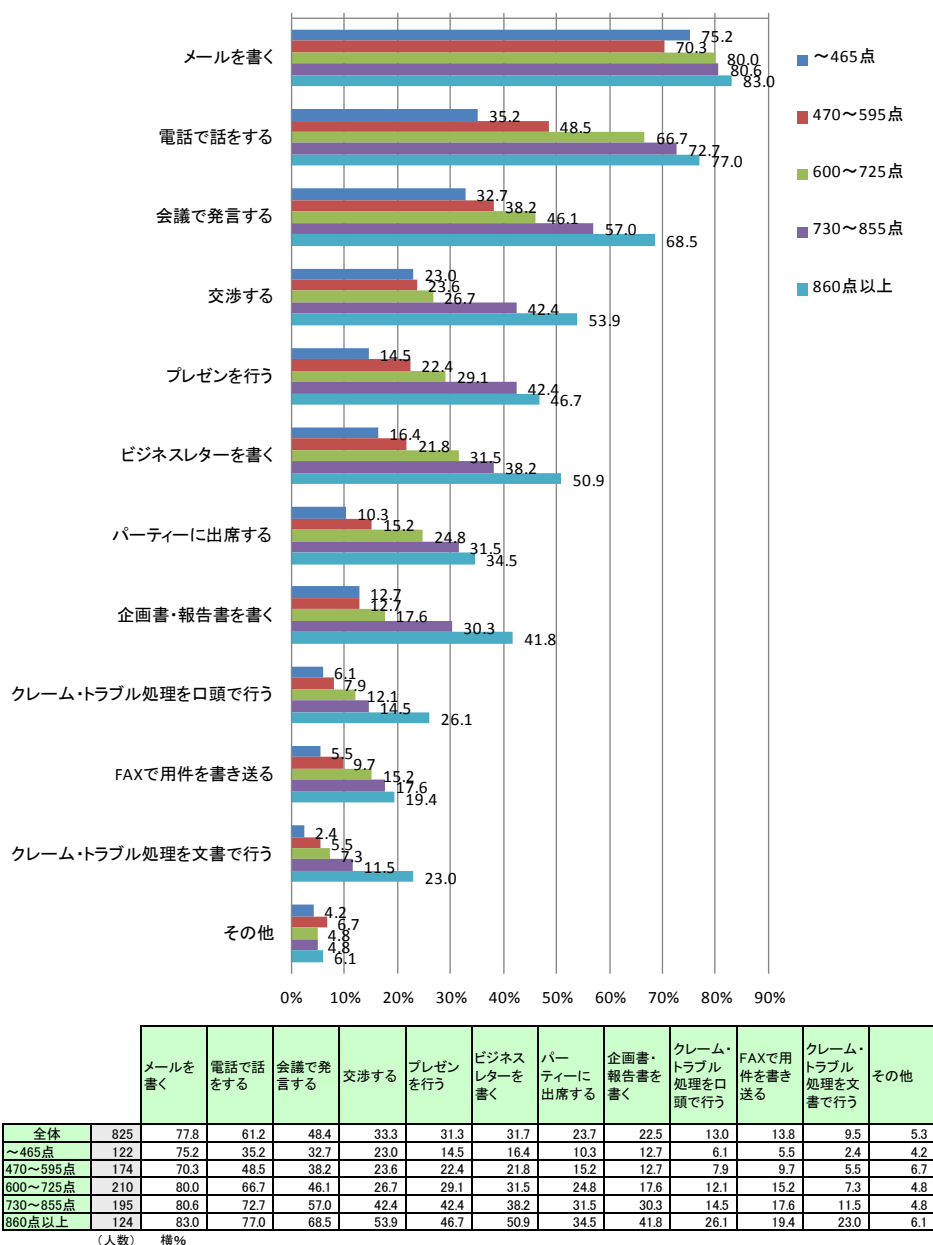


TOEIC®スコア別「英語の使用場面」

実際の英語使用場면을 TOEIC®スコアグループごとに比較すると、下のグラフのようになる。スコアに関わりなく英語を使っている場面（【メールを書く】）と、高スコア者ほど多く担当する場面（【プレゼンを行う】等）とに分かれている、という実態がみえる。図表から見える特徴は以下のとおりである。

1. 【メールを書く】はどのスコアレンジの人も高い割合で行っており、スコアレンジによる差は小さい。
2. 【会議で発言する】【電話で話をする】はどのスコアレンジの人も行っているが、スコアレンジによる差が大きい。高スコアの人ほど行っている人の割合が高くなっている。
3. 【交渉する】【プレゼンを行う】【企画書・報告書を書く】【クレーム・トラブル処理】などの業務は、スコアレンジが高くなるに従って担当する割合が増えている。英語能力が高まるのに応じて行う業務の範囲が広がっているのがうかがえる。

TOEICスコア別「英語の使用場面」



■ 7 ■ 英語を使う仕事相手

⇒日本人が英語を使って仕事をする相手として、ネイティブスピーカー、ノンネイティブスピーカーの割合に大きな開きはない。英語を使って「何をするか」は英語能力に応じてその内容が変化している。

仕事で英語を使った 825 人に対してのみ以下の質問をした。業務内容ごとに仕事相手を「英語圏の人（ネイティブスピーカー）／非英語圏の人（ノンネイティブスピーカー）／英語圏の人か非英語圏の人かわからない」から選んでもらった。

あなたは、直近 1 年以内で、英語で以下のお仕事を行ったとき、その相手はどのような方でしたか。頻繁に仕事をした相手を全て想定して、あてはまる方をすべてお選びください。

■話す

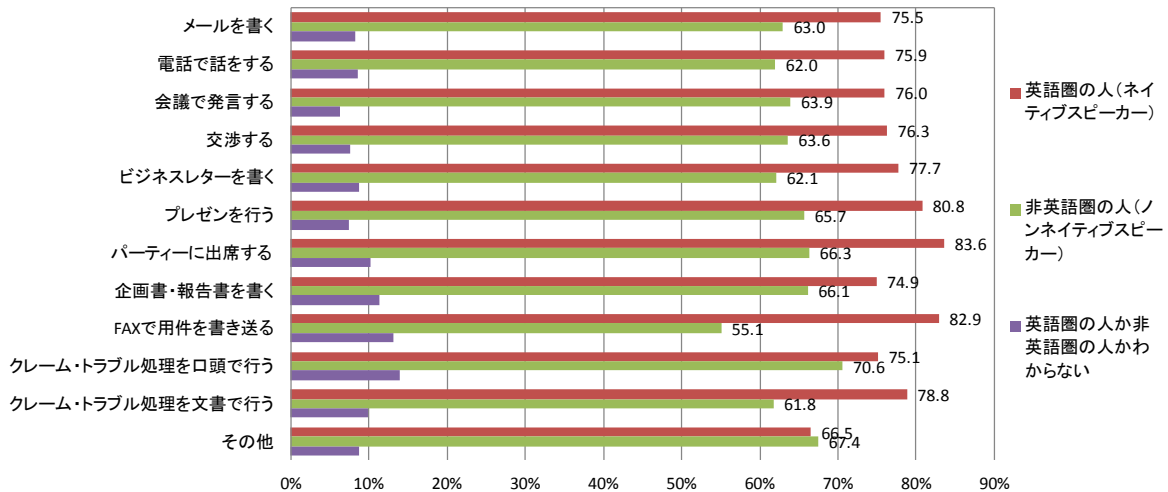
電話で話をする／会議で発言する／交渉する／プレゼンを行う／パーティーに出席する／クレーム・トラブル処理を口頭で行う

■書く

メールを書く／ビジネスレターを書く／企画書・報告書を書く／FAX で用件を書き送る／クレーム・トラブル処理を文書で行う

全体の大きな傾向としては、下のグラフから分かるように、英語を使う仕事相手としてネイティブスピーカーの方がやや多いもののノンネイティブスピーカーが占める割合との間に極端な開きはないと言える。これは、英語を使って仕事を進めている日本の経済活動の現実を反映しているものと思われる。

英語を使う仕事相手



英語を使って行うこと	全体	英語圏の人 (ネイティブ スピーカー)	非英語圏の人 (ノンネイティ ブスピーカー)	英語圏の人が 非英語圏の人 かわからない
メールを書く	642	75.5	63.0	8.3
電話で話をする	505	75.9	62.0	8.6
会議で発言する	399	76.0	63.9	6.3
交渉する	275	76.3	63.6	7.5
ビジネスレターを書く	262	77.7	62.1	8.7
プレゼンを行う	258	80.8	65.7	7.4
パーティーに出席する	195	83.6	66.3	10.3
企画書・報告書を書く	185	74.9	66.1	11.4
FAXで用件を書き送る	114	82.9	55.1	13.1
クレーム・トラブル処理を口頭で行う	107	75.1	70.6	14.0
クレーム・トラブル処理を文書で行う	79	78.8	61.8	9.9
その他	44	66.5	67.4	8.8

(人数) (%)

TOEIC®スコア別にみた「英語を使って仕事をする相手」

TOEIC®スコアグループごとに「誰を相手に」「何をするか」を見ていくと、下の図表で示すような比率になる。低目のスコアグループがノンネイティブスピーカーを相手にする比率が高くなっているのが特徴として見える。

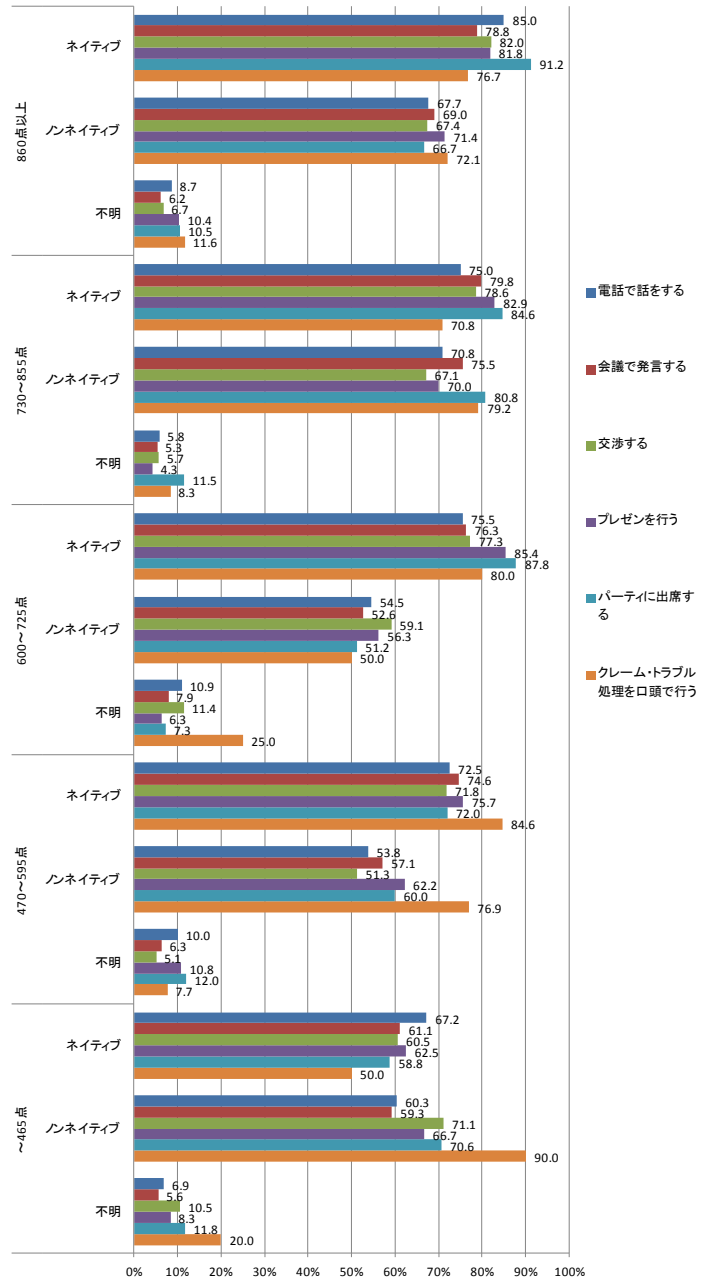
465点以下グループに注目すると、【交渉する】【プレゼンを行う】など英語を「話す」場合、ノンネイティブスピーカーを相手にする割合の方が高い。英語を「書く」場合には、調査した全項目においてノンネイティブスピーカーを相手にする割合の方が高くなっている。

これは何を意味するのだろうか。経済活動の「グローバル化」が進展する中で英語のノンネイティブスピーカー同士が、英語を共通言語として何とか英語を駆使して仕事を進めている実態を示していると言えないだろうか。

1. 英語を「話す」場合と「書く」場合で、同じような傾向を示している。
2. TOEIC®のスコア別、「英語を使って何をするか」の行動別に見ると、英語能力に応じた「役割分担」があるようだ。以下で3つの英語使用シーンについて見てみる。

- a. 【交渉する】相手は、「465点以下」ではノンネイティブスピーカー（71.1%）がネイティブスピーカー（60.5%）より多いが、「860点以上」ではネイティブスピーカー（82.0%）がノンネイティブスピーカー（67.4%）を上回る。
- b. 【メールを書く】相手は、「465点以下」ではノンネイティブスピーカー（62.1%）がネイティブスピーカー（58.1%）より多いが、「860点以上」ではネイティブスピーカー（83.9%）がノンネイティブスピーカー（71.5%）を上回っている。

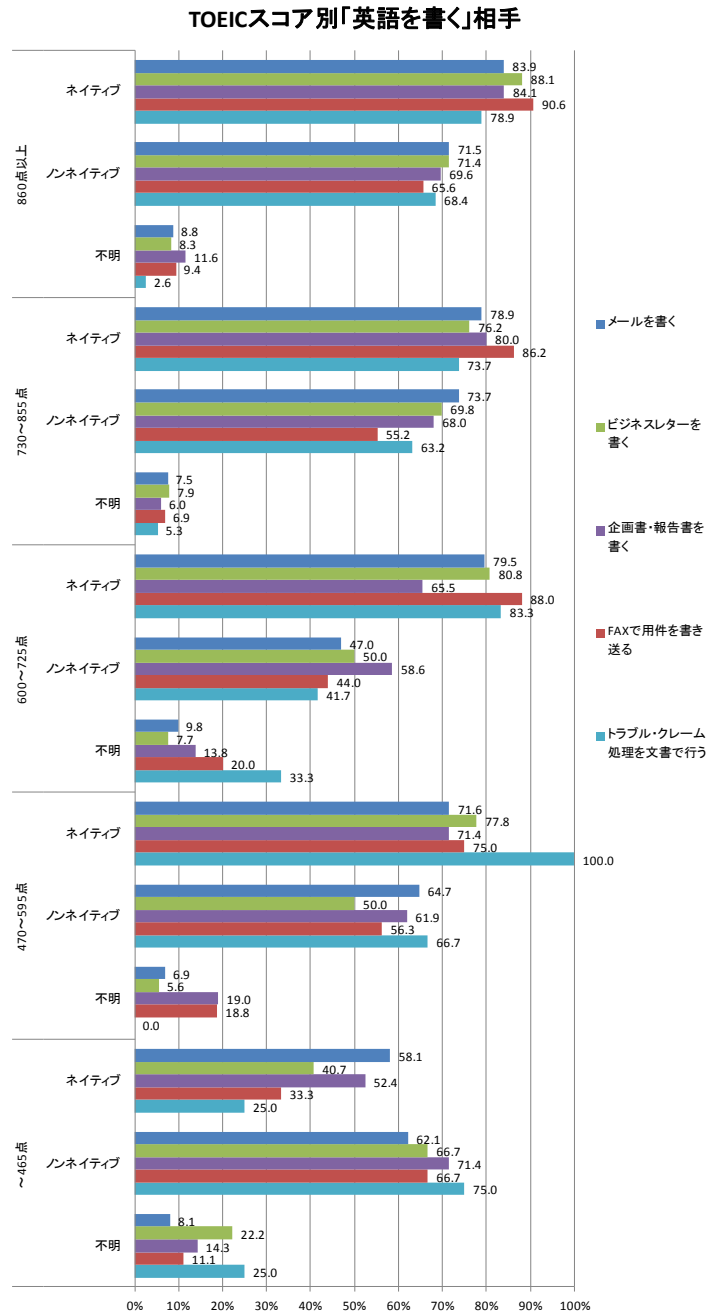
TOEICスコア別「英語で話す」相手



TOEIC	相手	電話で話をする	会議で発言する	交渉する	プレゼンを行う	パーティに出席する	クレーム・トラブル処理を口頭で行う
~465点	ネイティブ	67.2	61.1	60.5	62.5	58.8	50.0
	ノンネイティブ	60.3	59.3	71.1	66.7	70.6	90.0
	不明	6.9	5.6	10.5	8.3	11.8	20.0
470~595点	ネイティブ	72.5	74.6	71.8	75.7	84.6	72.0
	ノンネイティブ	53.8	57.1	51.3	62.2	60.0	76.9
	不明	10.0	6.3	5.1	10.8	12.0	7.7
600~725点	ネイティブ	75.5	76.3	77.3	85.4	87.8	80.0
	ノンネイティブ	54.5	52.6	59.1	51.2	56.3	50.0
	不明	10.9	7.9	11.4	6.3	7.3	25.0
730~855点	ネイティブ	75.0	79.8	78.6	82.9	84.6	70.8
	ノンネイティブ	70.8	75.5	67.1	70.0	80.8	79.2
	不明	5.8	5.8	5.7	4.3	11.5	8.3
860点以上	ネイティブ	85.0	78.8	82.0	81.8	91.2	76.7
	ノンネイティブ	67.7	69.0	67.4	71.4	66.7	72.1
	不明	8.7	6.2	6.7	10.4	10.5	11.6

(%)

- c. 【電話で話をする】相手は、「465 点以下」ではノンネイティブスピーカー60.3%、ネイティブスピーカー67.2%、「860 点以上」ではノンネイティブスピーカー67.7%、ネイティブスピーカー85.0%で、ともにネイティブスピーカーの割合が高い。



TOEIC	相手	メールを書く	FAXで用件を書き送る	ビジネスレターを書く	企画書・報告書を書く	トラブル・クレーム処理を文書で行う	その他
~465点	ネイティブ	58.1	33.3	40.7	52.4	25.0	85.7
	ノンネイティブ	62.1	66.7	66.7	71.4	75.0	57.1
	不明	8.1	11.1	22.2	14.3	25.0	14.3
470~595点	ネイティブ	71.6	75.0	77.8	71.4	100.0	63.6
	ノンネイティブ	64.7	56.3	50.0	61.9	66.7	63.6
	不明	6.9	18.8	5.6	19.0	0.0	0.0
600~725点	ネイティブ	79.5	88.0	80.8	85.5	83.3	87.5
	ノンネイティブ	47.0	44.0	50.0	58.6	41.7	37.5
	不明	9.8	20.0	7.7	13.8	33.3	0.0
730~855点	ネイティブ	78.9	86.2	76.2	80.0	73.7	50.0
	ノンネイティブ	73.7	55.2	69.8	68.0	63.2	100.0
	不明	7.5	6.9	7.9	6.0	5.3	25.0
860点以上	ネイティブ	83.9	90.6	88.1	84.1	78.9	50.0
	ノンネイティブ	71.5	65.6	71.4	69.6	68.4	80.0
	不明	8.8	9.4	8.3	11.6	2.6	10.0

(%)

まとめ

以上が、今回の調査結果の概要である。一般イメージに反して、仕事で英語を使っている人は主に日本国内で学習してきた場合が多く、不自由なく英語を使いこなしている人は一部にとどまることが分かった。TOEIC®テストのスコアとの兼ね合いで見ると、①スコアの低い層も高い層も英語を使用していること、②「誰に対して」「英語を使って何をするのか」という業務内容に応じて語学能力別に一定の役割分担をしつつ仕事を進めている様子が見えてきた。

TOEIC®スコアと「話す能力」との関連に関しては個人差が大きいことを「アルク英語教育実態レポート 2014」で示したが、以下で本調査で分かった「仕事で英語を使っている人」の特徴を TOEIC®スコアレンジごとにまとめてみたい。

■465 点以下グループ

全体の 14.8%を占める。英語を主に国内で勉強したのが 8 割強。現在は特に学習していないとする人の割合が 4 割強と 5 グループの中で最も高いが、週 1～4 時間英語を学習している人の割合を合算すると 48.1%と他グループと大差ない。相手がネイティブスピーカー、ノンネイティブスピーカーを問わず、7 割強の人がメールを書いている。英語で話す場合も書く場合も仕事相手はノンネイティブスピーカーの方が多い、というのがこのグループの傾向。

■470～595 点グループ

全体の 21.1%を占める。英語を主に国内で勉強したのが 7 割強。特に英語学習をしていないのは約 3 割だが、週に 1～4 時間学習している人を合算すると 61.5%となり 5 グループ中最高割合を示す。メールを書くのは 7 割強で、その相手はネイティブスピーカーの方がノンネイティブスピーカーよりやや多い。英語で話す場合、どのようなタスクを行うにしても相手はネイティブスピーカーがノンネイティブスピーカーを上回っている。

■600～725 点グループ

全体の 25.5%を占め構成比が最も高い。英語は主に国内で勉強したという人が 5 割強。英語学習をしていないのは 2 割弱だが、週に 1～4 時間学習しているのは 60.2%。8 割の人が英語でメールを書いており、ネイティブスピーカー相手が約 8 割、ノンネイティブスピーカー相手が 5 割弱とその差が 5 グループ中最大になっている。英語を話す相手はネイティブスピーカーの方がノンネイティブスピーカーより多く、その差は他のグループで観察できる差より大きくなっている。

■730～855 点グループ

全体の 23.7%を占める。英語を主に国内で勉強したのが 5 割弱。仕事以外で英語を学習していないのは 2 割強、週 1～4 時間学習するのは 54.6%である。メールを書くのは約 8 割で、相手が誰かによる大きな差はない。英語を話す場合にも相手がネイティブスピーカー、ノンネイティブスピーカーでその比率に大きな差がない。

■860 点以上グループ

全体の 15.0%を占める。英語を主に国内で学習した割合が約 3 割と 5 グループ中最低、英語圏で 1 年以上の留学・勤務体験がある人の比率が 5 グループ中で最も高い。特に英語の学習時間を割いていないのが 2 割強、週 1～4 時間学習しているのが 42.9%。5 割強の人が英語で交渉を経験し、8 割強の人が英語でメールを書いている。電話で英語を話す場合、相手がネイティブの場合 85.0%、ノンネイティブの場合 67.7%と差が大きくなっているのも特徴である。

今後の課題

今回の調査では、仕事で英語を使っている 825 人の方々から「私は英語で〇〇ができる」という形で CAN-DO List (CDL) 開発のための項目を募り、3000 を超える項目が集まった。この項目内容を精査・整理し、追って「仕事の英語 CAN-DO List」を公表する予定である。各種テストの「スコア」「級」「レベル」が仕事現場で英語を使って何ができると言える能力を示しているのかを分かり易い形で提示したいと考えている。

1 例を挙げる。今回の調査の回答者には、下のような CAN-DO List から自分ができると思う項目をひとつ選択してもらった。その際、自信の程度を示すために①「日本語で行うのも困難である」、②「英語で行う場合、不安があり、できないが、日本語であれば行える」、③「英語で行う場合、非常に不安をおぼえつつも、何とかできる」、④「英語で行う場合、

あなたは、以下の仕事に関する事柄を英語で行う場合、あなたはどの程度自信を持って行うことができますか。(複数回答)

1 職場で、席を外している人がどこにいるか、他の人に尋ねたり、答えたりすることができる。

2 食事に招待されたとき、食べ物や飲み物についての好き嫌いを聞かれて、答えることができる。

3 職場の定期的な会議で、自分の担当業務に関する現状や今後の予定などについて、自分に直接向けられた簡単な質問に答えたり、人の助けがあれば、自分の考えや賛意を示すことができる。

4 来客に自分の会社などを案内するとき、各部署や施設などを短い簡単な言葉で紹介することができる。

5 職場の定期的な会議で、新しい商品開発など、議題の概要を理解し、事実確認をしたり、自分の意見を述べたりして、ディスカッションに参加することができる。

6 ガイドとして有名な観光地などを案内するとき、あらかじめ準備してあれば、名所や名物などを、ある程度詳しく紹介することができる。

7 会社などの職場で、取引先とトラブルがあったとき、トラブルの内容や取引先とのやりとりなどについて上司に正確に報告し、上司からの質問に答えたり、今後の対応について指示を受けたりすることができる。

8 職場の企画会議などで、あらかじめ準備してあれば、自分の企画案について図表やグラフなどを示しながら、明確に詳しく説明し、質問に的確に対応することができる。

9 問題解決や人事案件など、仕事上の目的に合った話し方や表現を用いて、自然な流暢さを保ったまま、顧客または同僚を相手に、自分の考えを正確に述べることができる。

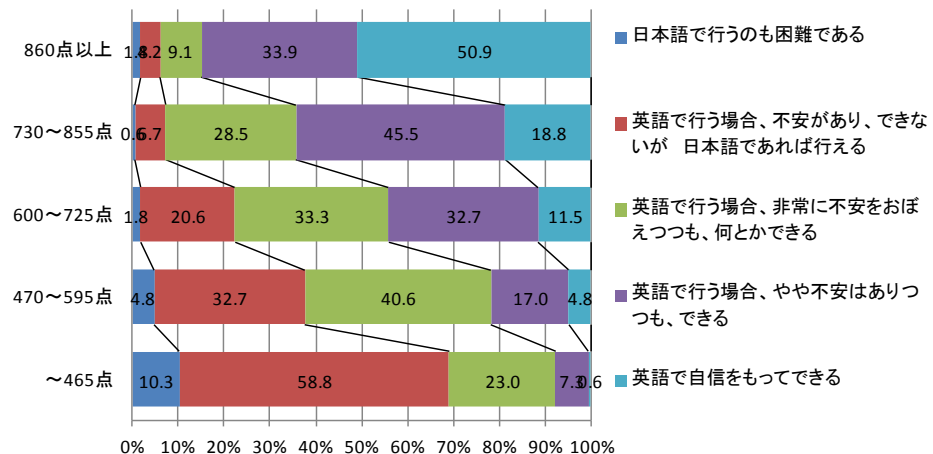
やや不安はありつつも、できる」、⑤「英語で自信をもってできる」の 5 段階からもひとつを選択してもらった。この CAN-DO List は、『JF 日本語教育スタンダード 2010 利用者ガイドブック』(独立行政法人国際交流基金 2010) を参考に作っており、下に行くに従って高い能力が必要になる「行動」を示している。

例えば、【職場の定期的な会議で、新しい商品開発など、議題の概要を理解し、事実確認をしたり、自分の意見を述べたりして、ディスカッションに参加することができる】に関しては、下のような分布になった。

高スコア者ほど「自信」の度合いが高くなっているのは自然なことであろう。注目したいのは、「英語を使って会議で自分の意見を言う」というタスクを TOEIC® 400 点台から 700 点台の人たちの中に「非常に不安をおぼえつつも、何とかできる」と考える人が多いという事実である。ここでは「どの程度英語がうまくできるか」ではなく回答者の実際の行為の存在と自信の程度を問うている。

このような自己評価と回答者の TOEIC®スコアとを参照しつつ、回答者自身が記述した「〇〇ができる」という項目内容を精査して CAN-DO List を開発する予定である。

【職場の定期的な会議で、新しい商品開発など、議題の概要を理解し、事実確認をしたり、自分の意見を述べたりして、ディスカッションに参加することができる】





◆連絡・問い合わせ先◆

株式会社アルク
アルク教育総合研究所
東京都杉並区永福 2-54-12
Email: mark@alc.co.jp